

目的 地震等の災害時における工学的面からの研究は盛んであるが、食糧面における研究は、非常に立遅れた現状にある。非常食についての必要条件は、単に栄養的な充足だけでなく、衛生的・経済的・面からの検討に加えて、し好的な配慮も欠かせないものと思われる。そこで現在、非常用備蓄食糧の主体となっている乾パン、かんづめを中心に、それ等を実際に試食しながら、望ましい非常食のあり方について、身体の生理的な変化も含めて、乾パン食の受容性について検討した。

方法 調理のための熱源、飲用以外の水は使えないことを前提として、乾パンと水（水グループ）、乾パンと水と野菜ジュース（ジュースグループ）、乾パンと水と牛乳（牛乳グループ）の食事を2日体験し、その間の食品の喫食量、体重の変化、及び生活時間を記録した。対象者は18~35歳の女性で各グループ12名。実施時期は1984年の冬期（ $-1.4 \sim -1.5^{\circ}\text{C}$ ）、春秋期（ $16.9 \sim 22.8^{\circ}\text{C}$ ）、夏期（ $24.1 \sim 30.9^{\circ}\text{C}$ ）。

結果 実験経続日数については、2日以上が、春秋、冬では8~10名であったが、夏期は2名にすぎなかった。体重の変化については、水グループは $-1.20 \sim -1.53^{\text{Kg}}$ 、ジュースグループは $-1.24 \sim -1.45^{\text{Kg}}$ 、牛乳グループは $-1.48 \sim -1.53^{\text{Kg}}$ でジュースグループが最も少なかった。一方食品の喫食量については、乾パンでは、水グループ $161 \sim 235^{\text{g}}$ 、ジュースグループ $184 \sim 303^{\text{g}}$ 、牛乳グループ $214 \sim 254^{\text{g}}$ で、ジュースグループが最も喫食しやすかったことがわかった。氷砂糖およびジュース、牛乳についても同様の結果であった。実験経続期間中に喫食したくなるものについては、季節によって、それぞれ特徴がみられた。